

を相手として、活潑な
 せ呑むの概を有して之を
 遇しうるの包容力なかる
 べからず常會に於ては少
 數のものゝのみが意見を吐

内郷村報の
六大使命

- 一、内郷村報の編輯して、村
- 二、村内公私各機關の活動状況を報導し
- 三、村内外の協同を計り、進現和進努力
- 四、村内外の協同を計り、進現和進努力
- 五、本村と本村出資者及本村關係者との
- 六、尙餘力を以て、國民善導に當る

内郷村報

天法人則
 從順ナ
 ルベシ

万主義なるかな!

大内民惠

宮城縣白石町なる、従弟鈴木菊
 藏君の一家では、年に一二回位
 「オタヨリ」と稱する、一家一
 門の消息や記録を印刷して(非
 賣品)之を關係者に配付して居
 るのであるが、此一文はそれに
 寄稿をたのまれて書いたもので
 ある。今月はなにか忙しくて、
 他に執筆する暇がなかつたので
 それに少し註釋を加へて、こ
 ゝに掲載することにしたのであ
 る。 —記者—

夫々各方面に活躍して居る、多数
 の後輩を睥睨する時に、咳一咳!
 胸中大に滿悦の感ありだ。いや、
 やまこに以て御自出度い次第
 で御座る!!

予は此世に生れて、何時の間に
 か六十四年を送迎して、若い頃其
 始末に困つた髪の毛も、いつしか
 行衛不明となり、相も變らず香氣
 で、飛びまはつて居る予も、最早
 鏡や櫛の用もなくなり、何處へ行
 つても老人扱ひにされるやうにな
 った。これも所謂、天法の致すま
 ことさ、禿頭一撫、悠々一笑!
 さて一族の面々を見渡すに、予よ
 りの長者は、武蔵の叔母上、内池
 の廉吉兄(商大名譽教授・法博)
 安田の姉上の三人で、西谷兄は同
 年なれども、予よりは幾分かおそ
 く生れた弟分!先以て予は、押し
 も押されもせぬ一族間の元老たる
 資格は、十分さいふべく、内
 地は、外地に遠散在して、

さて予は数日前、福島より岩沼
 を迂回しての歸途、予夫妻が仲人
 の結晶たる令孫の生長ぶりを見た
 り、又數多い令息達のうちから、
 豫て一人から頼まれて居つた婿養子
 を、他方から頼まかへた事であつ
 りで、「一角万」鈴木家を訪問
 したのであつた。

其職足ののびずのなさいふこゝを
 聞いた、我一族中に、我後繼者を
 得たことを、無上によれしく思は
 れたことであつた。

さて、この一考の結果、
 こゝに掲げたやうな、題目をえら
 んだのである。序文が大それ長く
 なつたが、いよくこれから、先
 いふ段取りになるのである。

「一角万」は鈴木家の屋號である
 予の一族は前述の通り、地域的に
 も、相當内外廣範圍にわたり、職
 域的にも、學者あり、軍人あり、
 官吏あり、實業家あり、變入あり
 奇人ありで、而して予の如きは、
 それ何れの部類に屬するや、萬年
 浪人にして、しかも變奇なるもの
 金に不自由なで、大臣でも、大
 將でも、御遠慮申上げず、非人や
 乞食と雖も、之を等しく同胞と心
 得て居る。況や一族をやで、暇あ
 りればふらり之を訪問して、我家
 のやうなつもりで、飲つたり(但
 し酒文は除外)食つたり、聊かも
 遠慮をしない。

かかるが故に予は、一族中の生活
 家風、家族等々、大抵手にさるや
 うに心得て居る。但し一族の平和
 を攪亂するの恐れあるを以て、之
 を吹聴しはるること丈は、金輪際
 堅く慎むは勿論、其一家に對し夫
 々伸長補短の献言丈は、忌憚なく
 之を實行して居るつもりである。
 又してもお談義が長くなつたが、
 いや、これからが本文だ。

「万」の「角」は、正方形で
 あつて、横面を、「万」は多数で
 あつて、満ち足れるを意味する。
 几帳面にして満足!之れ角万一家
 現在の姿である。

其今日ある所以は、いふ迄もな
 く、第一代富五郎、第二代富太郎
 何れも「富」の字を冠したる強剛
 そのもの、如き、五郎太郎兩祖の
 奮闘と精勵が、其基礎となり、
 建設となり、當主たる第三代菊藏
 君に及んだのである。第三代は、
 國家でも一家でも、其分岐点であ
 る。然るに我菊藏君は、香薰久し
 き、皇室の御紋章たる、「菊」を冠
 し、しかも之を一藏「すまふ健
 實さ!」之をうくるに至誠、誠太郎
 君を以てし、父祖の偉業を、敬仰
 する、敬太郎君を以てす。此精神
 !此傳統!角万萬々談なるかなで
 ある。

「角万」は、上敬神崇祖、下慈
 子愛孫の家庭である。神棚佛壇の
 清掃、供物禮拜等々は、常に至れ
 り盡せりであり、主人夫妻を中心
 として、一族協力共榮、和氣に、
 慈愛に、眞に露々たりだ。

其露々たる一家を、更に美化し
 て、錦上添花を添ふるものは、主人
 綾園一俳名を中心として、全家
 に横溢せる、俳句趣味である。何
 たる興味しきことよ。綾園は、斯
 界東北の雄、以下之に準ずである

角万の資産百萬!さば、これ宮
 城縣に於ける定評である。さて其
 眞否如何は、主人公ならではわか
 らぬ事、敢て第三者が、人の痴氣
 同様頭痛するに及ばぬ次第、あ
 る丈あるに相違ない、我不關焉
 である。

但し山上億長は、金銀財産と雖
 も子寶に如かず、と歌つたが、我

角万は、地方きつての資産家(其
 數量は不明確)である上に、七男
 二女計九人(其數量は明確)の子
 寶の所有者である。それが何れも
 身體強健であり、掛値のない秀才
 であり、才媛なのである。

長男誠太郎君は、福島高商出身
 の俊秀で、家事に従事する傍ら、
 時局柄懇請止難く、母校白中に
 教鞭をとり、更に郡の役員として
 大政翼賛に參じて居る。二男進之
 助君は明大、四男六一郎君は福島

角万俳句抄

三山の雪をかづきて稻城あり
 グランドを二週りして暖かし
 貞
 露汁は、染めて吸ふ男の子かな
 大陸に志さず子に布團縫ふ
 貞二
 爐邊樂し父の胡床を子のまきて
 鶯や八瀬大原はうすぐもり
 千歳
 梅の咲く畑に人のなにか摘む
 祥三
 菜の花や比叡山の影湖にあり
 落葉しきり白鳥羽なくしけり
 六一郎
 凍原にたてる農夫やいさましく
 花曇下ラの響のあまた、び
 禮吉
 鶯のこたま聞きある馬上かな
 高商を、何れも本年成績よく卒業
 東京に滿洲に夫々就職し、三男祥
 藏君は前述の通り、本年二高を出
 て京大に進學し、以下は夫々の學
 校に在つて、勉強中なのである。
 淨き財産と、秀づる子寶とを併
 せ有せる、角万の清福、又これ太
 なるかなである。

主人唯一人の令弟禮吉君は、陸
 一 二面へ續く—

本報發行は内郷一家の事業にし
 て、其の社務は予孫に關する遺
 産を繼承せしむるなり

本報定価 一月五元 半年十元 一年二十元
 發行所 内郷村報社
 編輯者 鈴木進之助
 印刷所 平活版所

一面より強く、軍歌中尉として、北支に轉戦、偉勳をたて、歸還、目下京都にあつて待機中、又令姉令妹は、何れも他に嫁して、既に良妻たり賢母たりであり、殊に特筆に値するものは角万對店員並に出入の人々の綿々絶えざる、美くしい關係である。

一族と出入り店員とが、角万を中心に一團融合して一體となり、敬神崇祖、慈子愛孫、協力共榮の

村常會委員會

村常會委員會は、規定通り、四月十五日午後三時、村會議事堂に開會。大内委員は三十分間、人生觀、宗教觀、大政翼賛及臣道實踐の意義を概説し、黒田參與は同三十分間、今月より其實施を見た、國民學校の解説をなし、終つて諸般の都合せや、審議を行つて、正五時閉會した。

靖國神社の臨時大祭に、合祀せられた、本村の祭神は左の一柱である。

陸軍上等兵 三富 竹藏

村内校名の改稱

四月一日より、内郷尋常高等小學校は、高坂國民學校と、第一尋常小學校は御厩國民學校と、第二尋常小學校は、内町國民學校と、第三尋常小學校は、宮國民學校と夫々改稱した。

軍事講演

本村出身、海軍大佐猪瀬乙彦氏は、四月十七日高坂國民學校に於て、其懇請により、全校児童に對して、

生活をなして居るのである。以上はこれ、角万主義の概観であつて、我等一族のまつて、籠みすべき家庭であるのである。

× 肇國精神、日本精神は、二千六百年彌榮えに榮えて来た。角万の一家一族は、其主義其精神を、「誠」「敬」以て之を繼承し、子々孫々、彌榮えに榮ゆると共に、忠良なる臣民の本分を全うし、大政を翼賛し奉るべきである。

三月三十日稿

時局に關する講演をなし、深き感銘を與へた。

健保議員改選

警察健康保險組合では、組合會議員満期となりたるを以て、其事業主と被保險者との互選を了し、次いで理事及理事長を決定した。其氏名左の通りである。

靖國合祀祭神

支那事變下七度迎へる、靖國神社の臨時大祭に、合祀せられた、本村の祭神は左の一柱である。

〔選定の部〕一三名
濱崎善三郎 井上辛牛郎
小島 義彦 福島 繁
林田 滿 上原 四郎
齋藤 祐治 江川鋼太郎
都築 源策 志賀 隆壽
御代 富彌 北山準之進

〔互選の部〕一三名
土岐 文夫 佐藤七太郎
平子 義茂 藤原 民治
安藤 勝見 松崎 正男
渡邊 勝治 大和田英馬
矢吹 佳秋 坂本 幸太
羽會部 仙吉 本間 徳雄
大内 福五郎 遠藤 恒吉
泰樂 秀政 日野 圓太郎
早川 亥之吉 木田 美文
大谷 榮五郎 菊田 幸太夫
谷口 榮十郎 阿部 幸八
佐藤 辰雄

〔選定議員の互選〕七名
濱崎善三郎 井上辛牛郎
小島 義彦 福島 繁
上原 四郎 御代 富彌
山崎 甚太

〔互選議員の互選〕七名
山崎 甚太 御代 富彌
濱崎善三郎 井上辛牛郎
小島 義彦 福島 繁
上原 四郎 御代 富彌

内町 兒童家庭生活訓

- 1 起る時間は正しくきめてねぼろは朝から負けたしるし。
- 2 歯をみがけ、心をみがけ冷い水で顔を洗へ。
- 3 すがすがしい氣持で、神や佛に手を合せよ。
- 4 朝の御飯を静かにいただきます。(いただきます。いたゞきました。忘れものなく元氣で登校(行つて参ります))
- 5 正しい心と丈夫なからだ鍛へては「よい日本人」
- 6 家に歸つてから
- 7 1 歸つて急いで道草せずに

平商業青年隊
本村は第二區
平商業報國會の青年隊結成式は、四月十二日午後一時から、平商業校講堂に開かれたが、

△會長、山崎忠兵衛。
△副會長、日野定則。
△同、稻葉八壽。
△同、三氏に決定。各區別隊長その他の役員は、追つて決定することになった。同隊は大政翼賛會縣支部の部門として活動するもので、平地區一市一町十五ヶ村を六區に分け、本村は其第二區である。

〔理事〕 山崎 甚太
〔理事長〕 濱崎善三郎

〔理事〕 山崎 甚太
〔理事長〕 濱崎善三郎

●内町學校職員信條
一、正シキ人生觀國家觀ヲ堅持シ教育報國ニ邁進センコトヲ期ス(信念)
二、必身ノ鍛錬ニ努メ恒ニ旺盛ナル研究心ヲ持ツ以テ師表タルニ恥ザランコトヲ期ス(修養)
三、和衷協同各自責任ヲ重シ職務ノ完遂ヲ期ス(職責)

●本紙贊助金寄贈芳名
金貳圓 桑折 菅野 廣諾
金貳圓 新 三浦 忠
金貳圓 内 根本 林平
金拾圓 福 白石 頑美
金五圓 平 齋藤 榮一
金貳圓 三 織方 政次

教育制度改革概論

矢野 恒太郎 大内 民憲著
(四六版二一頁 定價五十錢 税六郵額)

六號 本年度工事着手

本年で本村地内完了

人的資源擴充の意味より見ても、本縣の人口増加率は流石に東北六縣關門として

の躍進振りを明示した。縣

我が國教育學界の權威

前京大總長小西重直博士

日本評論社

東京京橋三丁目

軍事部 請進
本村出身、海軍大佐猪瀬乙彦氏は、四月十七日高坂國民學校に於て、其懇請により、全校児童に對して、

教育制度改革概論

（四六版二一頁 定價五十錢 稅六郵給）

行き詰る現代の教育制度を解して、學理を實踐せ、歴史を實踐せ、新に大内案九主義を提議す。天下知名の士の賛同校章に違わらず。されど未だ一人の統攝者も現はれず。

- 小島 義彦 福島 繁
- 林田 滿 上原 四郎
- 齋藤 祐治 江川 鋼太郎
- 都築 源策 志賀 隆壽
- 御代 富彌 北山 進之進

冷い水で顔を洗へ。すがすがしい氣持で、神や佛に手を合せよ。（今日も眞面目に精を出します）

我國教育學界の權威
前京大總長小西重直博士
書を寄せて曰く、多年ノ御禮謝ヲ實地ノ御試練ニ基クテ眞實ニ大感謝ヲ捧ルベシト云々云々

發行所 日本評論社
東京區三丁目
東京所 内郷村報社

- 金貳圓 新殿 三浦 忠
- 金參圓 内郷 根本 林平
- 金拾圓 福島 白石 禎美
- 金五圓 平 齋藤 榮一
- 金貳圓 三春 織方 政次

六號 本年度工事着手
本年度で本村地内完了

六號國道の改良工事は、内務省直轄で、昭和十四年度以來繼續して、本村御厩より工を進め、今年度は藤棚地内から湯本町へかけて延長千二百米、副員擴張と堀坂の勾配並に屈曲を緩和することとなり、工費十萬圓で去る十二日起工した。過年度來の同道改良工事は、第一年度（十四年）工費十萬圓、御厩地内千六百五十米を改良し、第二年度も（十五年）工費十萬圓で御厩から藤棚まで千四百米を改良し（内小部分は十六年度に繰越し）本年度の藤棚、堀坂間の工事を以て、郡内で最悪路とせられて居た、本村地内の改良工事は完了するわけである。

石炭 黒十字賞

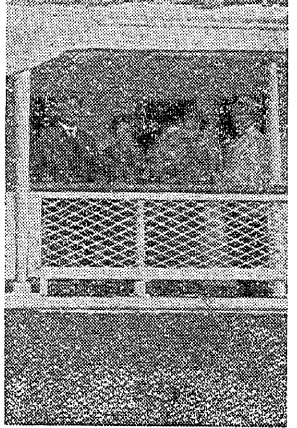
「黒十字」を受ける、石炭増産強調期間中の優良勞務者は、仙臺嶺山監督局で三十一名を簡拔、二十四日午前十時から、仙臺市齊藤報恩館で、衣川局長から表彰された。本縣關係は二十八名にのぼり、磐城からは左

縣下町村人口

筆頭は我内郷村
昨年十月現在の縣内人口は、三月十七日縣統計課から發表されたが、現住人口は百六十萬三千二百七十七人、前年よりは二萬六千五百二十二人の増加となり、時局下の

道昇段發表

過般平警察署武徳殿に行はれた、劍道昇段審査結果は、四月十四日發表された其昇段者は、三段七名、二段三十三名、初段七十三名一級十名で、内本村の分は左の通りである。
〔初段〕根本榮雄、島重辰、下山田薰、矢内孝直、坪井文朔。以上五名。
〔三段〕大越久五郎。
因に磐城勞務課勤務團谷乘廣氏は、其教授囑託として貢献する處多大である。



當年の嬰兒靖彦！

拜啓 春寒料峭の候、貴堂愈々御清榮奉賀上候。内郷村報每御御覽下され、隅から隅まで愛讀仕居候。雖有御禮申上候、貴堂には

二十四年前の靖彦君！

これは奈良一家のノル、港上陸當時の記念撮影。右より殿父、慈母、抱かれたのが當の靖彦君、向井夫人、下船の際靖彦君を抱き上げた記者。

外務省へ奉職！

（記者宛）
肅啓 春和景明之節高閣御備益々御佳適に被添候段奉慶賀候。陳者 私儀、東京商科大学在學中は、一方ならぬ御懇情を蒙り、難有奉深謝候。今般以御陸同校卒業と共に、外務省へ奉職、同省職員訓練所六ヶ月間の訓練過程を終了後、米國在勤を被命候に就ては、今後共御指導御懇情相賜度奉懇願候。昭和十六年四月 外務省通商課第一課 奈良 靖彦 敬 具

時局と隣組に關する講演會

四月四日午後一時半より平市公會堂日本間に於て常會と隣組の著者東部軍司令部參謀陸軍中佐鈴木嘉一氏の講演を聴く今左に之れが概要を摘記せん。
1 時局認識
蔣政權の抗日は英米の援助に依り愈々露骨に長期抗戰の迷夢に浸醉し聖戰完途の曙光だに見る能はざるにシテ、聯は瀕りに東進政策に狂奔畫策し米は又西方進出に之れ努め東亞

共榮圈の確立には今後愈々難關に遭遇し未曾有の事難日に緊迫せるを認識し軍民一如國家の總力を擧げて難局突破聖戰の目的貫徹に勇往邁進すべきの秋なり。

2 組織
各組織に當りては凡て十を以て一團とする所謂十進法による最適當とす而して從來の指導組織は主として上より下に及ぶ

内郷村 田口淳三

一四面へ續く

一 三面より續く
縦の指導法なりしも今後
の翼賛運動の實踐部隊と
しての最下部組織たる部
落常會隣組等専ら横の系
統より上に盛り上げる方法
をとるべきなり。

3 大和の精神

古來日本家庭の特長とす
る處は互に損益を問はず
權利義務を主張せず一圓
融合親和協力の美風を延
長して隣組に及ぼし茲に
一家庭を結成し更に部落
に及ぼしかく一郷一國
に及ぼして一大家庭を構
成し以て大和共力の精神
を發揮すべきは平時より
更に戦時に於て一層顯著
ならざる可らず。

4 常會と指導者

常會は大和の精神を基調
とし各人凡てが職域奉公
の精神振興を計るを目的
とする會合たるべし而し
て之れが指導の任に當る
ものは宜しく自己の責任
の重且つ大なるを思ひ常
に新聞書籍或は週報等に
より内外の情勢を詳かに
して時局認識を深め衆人
を相手としては清濁合は
せ呑むの概を有して之を
遇しうるの包容力なかる
べからず常會に於ては少
數のものゝのみが意見を吐

露し衆人は傍聴するの體
度を避け十分に衆意を述
べしむる様指導するを要
す。

5 前回の報告と次回の豫告
缺席者あるは免かるべか
らざるを以て前回の申合
せ事項を報告するは勿論

内郷村學事概報

◇尋常高等校 (高坂)

在籍、一三三三。修業生、一〇四
五。卒業生、二二八。優等賞、二
八五。精勤賞、六四五。六ヶ年精
勤賞、三九。部會賞、四。管轄太
郎、黒坂勇吉、伊豆英子、近藤惠
美子。新入生、二一五。

◎高等科
在籍、一一四三。修業生、六〇八
卒業生、五三五。精勤生、五〇九
八ヶ年精勤生、八六。部會賞、九
口助次郎、伊藤喜代松、小島トミ
遠西サト子、佐藤イセ、中井川タ
カ子。新入生、三三二。

▽中等學校入學生
◎官立弓削商船學校。卷幡明。
◎警中。管轄太郎、森定男、杉本
孝幸、仙北茂利、小山田昭三郎、
坪井昭、四家延昭、馬目久久、千
明寛、馬目欣英、林茂樹、佐藤委
弘、上遠野光正。

◎福馬師範。志賀美孝。
◎角田中學。根本敬忠。
◎石川中學。三瓶早苗。
◎岐阜中學。林茂樹。
◎白石中學。古澤昭二。
◎平商校。佐久馬光雄、八卷幸
男、伊藤武平、鈴木昭平、鈴木昭
三、橋本公雄、田村保則、新妻昭

なるも次回の行事等の豫
告は更に有効なりとす。
因に隣組にありては世帯
主若くは主婦のみの出席
にて満足すべきにあらす
夫婦會なり進んで家族
會となりてこそ初めて理
想的常會なるべし。

◇第一校 (御厩)

在籍、四三六。修業生、三六九。
卒業生、六三。優等賞、九二。進
歩賞、五。精勤賞、一六一。六ヶ
年精勤賞、五。部會賞、吉田隆治
▽中等學校入學生
◎警中。吉田隆治、山崎龍一、水
野正至。

◎平商。志賀欣一、松澤茂、志賀
勝。

◎警高女。菅波キヨ子、緑川欣
佐藤ヤス。

以上受持指導、北原智恵子。

▽教員移動。
◎警中。郡山第二校へ、鈴木フク
警崎校へ、佐藤義雄。
◎警中。信給渡利校より、渡邊常
◎新任。師卒、橋本フミ。

◇第二校 (内町)

在籍、一九七四。修業生、一七〇
六。卒業生、二六八。優等賞、三
〇九。精勤賞、七五一。六ヶ年精
勤賞、四六。進歩賞、一七。部會
賞、四。佐々木亮、鈴木信彦、鬼
澤スミ子、高萩節子。兒童教育後
援會内町支部長賞、佐吉直、濱崎
新、大越カネ子、沼田雅子。
新入學生、三八九。

▽中等學校入學生。
◎警中。佐々木亮、住吉直、永山
傳、鈴木昭三、濱崎新、鈴木信彦
沼田源、渡邊隆、駒木根隆夫。
◎平商。吉田智正。
◎警女。鬼澤スミ子、足立和子、
高萩節子、沼田雅子、小林房子、
大越カネ子、大塚和子、林芳子、
三瓶ヒロ子、池田綾子、瓜生スミ
子、川野スミ子、辻光子。
以上受持指導、上遠野晴重、廣
川登志雄、古市カナル、長塚キ
ミヨ。

▽教員移動。
◎警中。小野幸一、紺野ミツ。
◎警中。桶賀校へ、根本益村。大
浦校へ、古市カナル。
◎警中。平一校より、佐藤豊、合
戸校より、鈴木秀子。

◇第三校 (宮)

在籍、一四三四。卒業生、一九一
修業生、一二四三。優等賞、三〇
三。精勤賞、七一。六ヶ年精勤
賞、四三。進歩賞、七二。部會賞
四。高柳俊孝、千葉薫俊、近藤カ
ヨ、佐藤スミ子。六ヶ年精勤兒童
保護者表彰、四三。

▽中等學校入學生。
◎警中。太田久雄、高柳俊孝、鈴
木義雄、吉田幸雄、吉田重昭、關
後雄。

◎平商。寒河江達男、藁谷常雄。
◎警女。村上愛子、吉田カヨ子、
庄司禮子、佐藤スミ子、三部リツ
子、大高タカ子、反保子、圓谷
ミツ子、戸村タカ子、千葉トシ
友野チカ子。
以上受持指導、安部憲二、鈴木
正、上遠野馨、和田千代。

▽教員移動。
◎退職。野木一夫、東京へ。新妻
務、馬目太七。

◎警中。四倉校長へ、校長鈴木重
顯。四倉校へ、鈴木正、北會津東
山校へ、庄司主税。田村小野新町
校へ、上遠野馨、高坂校へ、鈴木
秀子。
◎警中。警崎校長より、校長野木
繁綱。大野校より、福羽全海。神
谷校より、浦山貞一。永井校より
竹島義國。

◎新任。大谷淑子、鈴木全一。

◇内郷家政女學校 (級)

在籍、一一七。本科卒業生、二五
研究科修了生、八〇。優等賞、本
科卒業生、六。研究科修了生、三
部會賞、笹原光子。精勤賞、二七
▽教員移動。◎退職。遠藤トミ。
◎新任。野村安子。

内郷村報の

六大使命

- 一、本報の編輯を指導して、村の発展を促進し、村の進歩を期す。
- 二、村内外各團體の活動状況を報導し、併せて其協力を計り、進現和進努力の實現を期す。
- 三、本村社會事業の進展を期す。
- 四、村の發展事業を指導し、之を促進す。
- 五、本村を本村出資者及本村關係者との關係を計り、其發展向上を期す。
- 六、尙餘力を以て、國民指導に當る。

其願をのびすのさいふこを
聞いて、我一族中に、我後繼者を
得たこと、無上うれしく思は
れたことであつた。

こゝで數日、訪問の折には、翼

「角」の「角」は、正方形で
あつて「帳面」を、「万」は多數で
あつて、満ち足れるを意味する。
几帳面にして満ち之れ角万一家
現在の姿である。

本報定價 毎月五元 一年五十四元
本報發行所 内郷村報社
編輯者 内郷村報社
印刷所 平活版所